AFICS-J

AFICS-JAPAN Newsletter

第 11 号

2019 年 1 月 31 日発行

Mission Statement

国連システム元国際公務員日本協会（AFICS-JAPAN）は、

- 国連システムの活動に協力します
- 会員のために必要な情報収集を行い、最新情報を提供します
- 会員相互の意見交換や情報交換のための交流会合を開催します
- 国際機関で働く人材育成を支援します

« 記事一覧 »

- 会長 年頭所感
- SGH 支援プログラム活動状況
- NY 国連日本人職員会会長 小松原茂樹氏との会合
- 国連広報センター所長 根本かおる氏の講演会
- 第 47 回 FAFICS Council 年次総会報告
- AFICS-J ウェブサイトの更新
- 会員短信：新入会員 1 名
- お知らせ：
  第 8 回年次総会の案内
  会費納入のお願い
  会員からの投稿募集

賀正 2019

年頭所感

会長　伊勢桃代

新春のお慶びを申し上げます。AFICS-J のメンバーの皆様とご家族のご多幸とご健康を衷心よりお祈りいたします。

皆様のご協力とご理解のお蔭により当協会は、本年創設から 7 年目を迎えることとなりました。 この間、総会の開催、元国連大使の方がたのご協力も得ながら「現場からの報告」を根幹とした講演会を開催して参りました。 又、会員の皆様の福祉に関し、年金や海外資産の取り扱いに関する説明会、国連関連手続き上のご相談への対応などを行って参りました。

2019 年に先ず望みたいことは、メンバーの皆様同士の交流を深め、AFICS-J の将来像についての活発な意見交換が行われることです。こういった機会を創りたく思っておりますが、ご協力のほどをよろしくお願いいたします。

2019 年には、2 年前から企画・実行された中学生・高校生を対象としたスーパーグローバルハイスクール（SGH）での国際的人

材育成プログラムを推進し、更に SGH 以外の学校にも広めていきたいと考えております。こういったプログラムは、当会独自の場合もありますが、文科省との協力関係で行われ、2018 年には、文科省・筑波大学主催の SGH 全国高校生フォーラムに、AFICS-J から 10 人のメンバーがアドバイザーとしての役割を受け持ちました。又、本年から実施される文科省による WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業へも参加していきます。これらの活動は、将来国連で又国際的に活躍する人材の増強に貢献することを目指しており、今後とも文科省との協力を進めていきたいと思っております。

民主主義を基本とした国際体制構築に 74 年間努力を続けてきた国連は、現在いろいろな意味で非常に困難な立場に立たされております。「国連」を外交政策の一つの中心としてきた日本にも陰りが見えます。国民の国連への関心度は先進国の中でも低い状態にあります。AFICS-J として、2019 年から国連への理解度を高める活動を積極的に進めるべきではないかと考えております。SGH 活動による若い世代への呼びかけは重要です。同時にもっと広く国連を一般の方がたに伝える活動を模索したく思います。

創立以来、AFICS-J の活動は執行委員を始め、メンバーの方がたの献身的協力によって成り立ってきました。SGH を対象としたプログラムに見えるように、東京以外の学校をお訪ねすることは大事です。メンバーの皆様の広いご協力とご参加をお願いいたしたく存じます。

2019 年には、組織としての将来又持続性のあり様を考える必要があると思います。 課題の例としては、AFICS-J の NGO や NPO など体制についての可能性、財政の強化、住所の確立などがあります。又、「繋がり」については、メンバーの皆様同士の交流、他の AFICS や日本人職員会との繋がりなどに考慮を払いたく思っております。以上について、皆様のご意見をお聞かせいただきたく思います。

本年が皆様の素晴らしい年となりますようお祈りいたします。

2019 年 1 月吉日

SGH 支援プログラム活動状況

第 7 回年次総会において、SGH 支援プログラムの推進が認められ、そのタスクフォースが立ち上げられ、合意された活動を始めたことは前号で報告した。

その後、学校別アプローチとして、青山学院高等部、岐阜県立大垣北高等学校及び公文国際学園で活動を行った。青山学院高等部では 10 月 3 日に同校のグローバルウィークで朝の礼拝において山本和副会長が全校生徒 1200 人に向けて平和のメッセージを送り、放課後に開催されたワークショップでは山本副会長と山崎節

子会員が「国際機関による平和構築とコミュニティ再生」に関しての講義、質疑応答の後、個別のアドバイスも行った。岐阜県立大垣北高等学校では 10 月 5 日に高瀬千賀子執行委員が 1 年生全員（8 クラス 324 名）を対象に同校の平成 30 年度第 2 回 SGH グローバル講演会として「持続可能な社会の実現」に関して講義を行った。更に、公文国際学園では、10 月 31 日に高校一年生を対象としたキャリアに関する講義の一部として、興味を示した 47 名に対して森田宏子会員が講義と質疑応答を行なった。

より大きな括りの活動としては、１２月１５日に開催された 2018 年度スパーグローバルハイスクール（SGH）全国高校生フォーラムへの参加と 12 月 26 日に開催された平成 30 年度岐阜県 SGH 校合同発表会への参加が挙げられる。

SGH 全国高校生フォーラムは毎年文部科学省と筑波大学（SGH 幹事校管理機関）主催で行われるもので、昨年はオブザーバーとして数名が参加したが、今年は文部科学省からの要請で AFICS-J より足立香会員、長谷川真一会員、長谷川祐弘会員、井上健執行委員、小林正典会員、森田宏子会員、忍足健朗会員、高瀬千賀子委員、山本和副会長、和気邦夫執行委員（アルファベット順）の 10 名が生徒交流会のディスカッションテーマのアドバイザーとして参加した。生徒交流会は生徒たちが討論を通して交流の場を広げネットワークを作ろうという目的で今年初めて設けられたもので、10 のテーマごとに、30 名ほどの生徒が 5－6 人のグループに分かれ、更にそのグループも途中で変わりながら討論を進めるという試みで、アドバイザーはその討論が活発に進む様にアドバイスをし、最後に講評を行った。AFICS-J には、様々なバックグラウンドの会員がいるため、文部科学省から提示された 10 テーマそれぞれにふさわしいアドバイザーを提案することができ、大いに歓迎された。役割としては、あくまでも生徒主体で討論を促すことが主であったため、従来の講義を中心とした活動とはまた違う取り組みであり、「ワールドカフェ方式」を参考に行うとされたため、AFICS-J ではその勉強会も開いて、どの様に生徒に接するべきかを学んでこの役割に臨んだ。その際、AFICS-J 本来の活動の目的である国連の役割を伝えるという点が薄れるのではないかという懸念もあったが、その点は最後の講評に反映させるということで落ち着いた。結果として、アドバイザーで参加していただいた会員の方々からは、学生と直接関わりが持てたことについて、とてもポジティヴな感想を頂いた。 また、AFICS-J が元国際公務員の集まりであり、高校生のグローバル人材育成の支援活動をしていることなどに関して、SGH 関係者に広く知って頂くことができたと考える。

岐阜県指定の 5 校の SGH 校による合同発表会には、岐阜県教育委員会からの要請により、AFICS-J より井上健委員、藤村建夫会員、高瀬千賀子委員、登丸求己会員、山崎節子会員（アルファベット順）の 5 名がワークショップのファシリテーターとして参加した。合同発表会では、第一部で岐阜県指定の SGH 校 5 校がそれぞれ成果の発表を行い、第二部をワークショップとして、予め提出しておいたテーマについて、ディベート形式で討論を行った。 第二部のテーマに関しては、幹事校であった岐阜県立大垣北高等学校の担当教師との相談の下、我々からテーマとそれに関する簡単な資料を提出した。これらの資料は事前に送り、生徒たちに予習してもらう様にした。討論は日本語で行われたが、それぞれのグループで活発な討論が繰り広げられた。この場合も生徒の討論を促すことが主な目的であったため、国連の役割を伝えるということは前面に出せなかったが、テーマを決める段階である程度国連の活動に即して選ぶことができ、また最後に余った時間を使って、国連の活動について話すことができた。 この 5 校の中で文部科学省指定の SGH 校は大垣北高等学校だけだが、この学校も指定 5 年目を終えるので、来年度からは文部科学省の指定を外れる。 来年度も岐阜県は SGH 校の指定を続けるので、岐阜県では SGH の活動が可能な範囲で続けられるが、文部科学省指定の SGH 校に関しては順次指定が終わることから、この様な地方自治体の取り組みは注目される。

関西では、12 月 18 日に兵庫県教育委員会が開催した平成 30 年度ひょうごグローバルリーダー育成推進懇話会で関西在住の久木田純会員と奥田千恵子会員が AFICS-J の活動を説明する機会を得た。 ひょうごグローバルリーダー育成推進懇話会は、兵庫県内の SGH 指定校 8 校、アソシエート校 6 校、ひょうごスーパーハイスクール（HSH） 6 校、大学および民間企業からなる委員、管理機関として兵庫県教育委員会事務局と神戸市教育委員会事務局から構成されている。9 月に高等教育課長を訪問し、AFICS-J の活動を説明したことがきっかけとなって、懇話会で兵庫県内の関係校・機関への説明の機会を得ることができた。

直接学校と関わるこれらの活動と並行して、国連を紹介する際の基本資料の作成も、有志による勉強会や、メールを通じての意見交換の形で進められ、現時点での最終版を完成させた。この資料は必要に応じてアップデートされることを前提として、タスクフォースのメンバーが誰でも使うことができる様、AFICS-J ホームページ内の SGH 支援プログラムのページの中に作られ、タスクフォースメンバー限定のアクセスサイトに載せてある。このサイト

には、上記の参考資料の他、タスクフォースの会合の資料や学校別アプローチに関する資料がアクセスできる様になっている。今後は、誰もがアクセスができる SGH 支援プログラムのページで、活動の報告や広報を充実させていきたいと考えている。

今後の活動としては、2019 年 2 月 20 日に広島県立広島高等学校で「グローバルリーダーに求められる力」という講演テーマの下、「国際協力の実際」や「世界が求める人材とは」について講義し、質疑応答を行うことが予定されている（忍足謙朗会員）。また、その他の学校とも引き続き連絡を取っていくこと、学生との様々なかかわり方があることから講義やワークショップの進め方についての勉強会の開催など念頭におきたい。

（記録：高瀬千賀子執行委員、井上健執行委員）

ＮＹ国連日本人職員会会長　小松原茂樹氏との会合

小松原茂樹氏　プロフィール

東京外国語大学卒業。ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス（LSE）で経済修士号取得。日本経済団体連合会事務局、OECD（経済開発協力機構）民間産業諮問委員会事務局で主に国際分野を担当後、2002 年　より UNDP アフリカ局に勤務。本部アフリカ局カントリーアドバイザー、 ガーナ常駐副代表（2007－2011 年）を歴任。

2011 年　アフリカ局 TICAD の責任者に就任後、TICAD V (2013 年　横浜)、TICAD VI（2016 年　ナイロビ）を担当。 現在 UNDP TICAD プログラムアドバイザー。

2018 年 2 月にＮＹ国連日本人職員会の会長に就任。

小松原茂樹氏と AFICS-Japan の執行委員との会合は、2018 年 7 月 3 日 10 時から 12 時まで UNU ライブラリー会議室で開催された。執行委員会からの出席者は 7 名であった。

冒頭、小松原氏から自己紹介があった。2002 年に UNDP アフリカ局に入り、2007 年から 2011 年までのガーナの副代表を経て、2011 年からアフリカ局の TICAD の責任者になった。TICAD V（横浜）、TICAD VI（ナイロビ）を担当，2019 年に TICAD VII が横浜で開催されるため、その準備で日本には度々来られている。国連に入るまでの 11 年間は経団連の事務局に勤務し、主に国際分野を担当された。

小松原氏は 2018 年 2 月に NY 国連日本人職員会の会長に就任された。職員会会則によると、活動分野は、1）NY 在中の職員の親睦や相互扶助を図る。2）世界中の日本人の国連職員との連携を図り、また、国連に関心を持っている人に対するアウトリーチをすることである。現在 NY にいる日本人職員の数は 200 名であるが、その他に、ワシントンの世界銀行の職員会（200 名）、ジュネーブ（150 名）、ウイーン（70-80 名）、ローマ（50 名）、バンコック（80 名）、その他にアフリカの各地

を含めると約 800 名になり、情報の共有、横のつながりを強化していきたいと述べられた。NY 国連日本人職員会では毎月 1 回発信している「邦人職員会便り」を共有しているほか、最近国連日本人職員会の Facebook を立ち上げ、現役職員にフィードバックする役目を果たし、横の繋がりを作ることと、日本国内のアウトリーチ活動も手掛けている。AFICS-J が取り組んでいる SGH 支援プログラム活動に対しても、今後現役職員にも広げていくことを表明された。

その後、執行委員との意見交換が行われた。現在の SGH 事業は 2019 年度から引き続き文科省を中心に新しい形に移行することになるようだが、AFICS-J としてどのように関わっていくのか、また NY 国連の現役職員も助っ人として出かけていくことができるように、協力関係を築くことを確かめた。

外務省について、日本人職員を増やすことは以前から試みているが、特に中堅職員や幹部職員を増やすことに力を入れており、新しい取り組みとして、既に社会経験がある人を中堅職員として国連に送ることを始めているという説明があった。国連日本人職員会でも現役の職員に対して、代表部と協力して情報交換の機会を得ることを積極的に行っている。また、世界中のフィールドで一人、二人で働いている職員にも情報を流している。AFICS-J からの意見で、現役職員の一時帰国の際には連絡をもらい、若い人に話を聞いてもらう機会を創ることが、国連に興味を持ってもらうことに繋がるとなるとの発言があり、AFICS-J のニュースレターを積極的に配信してもらうこともお願いした。

出席者からグテレス事務総長の国連改革について質問が出た。（1）Management のリフォームと、（2）国連開発システムのリフォームがあるが、小松原氏が関与する（２）は副事務総長が担当になり、かなり進んでおり、更に、SDGs について触れ、リフォームについての広範囲に渡る影響を説明した。2 つのリフォームの報告書は既に出ていると説明があった。報告書は下記サイトを参照。http://ask.un.org/faq/207525

上記の会合に引き続き、小松原会長から、2019 年に横浜で開催される第 7 回アフリカ会議（TICAD VII）の進捗状況や、日本人職員会を通じて A-J と現役職員との連携、ネットワークの構築議題として、8 月 9 日、AFICS-Japan のメンバーを対象に会合を持つことになった。あいにくこの日は台風の影響で公共交通が乱れることが予想されたため、午前中の会合の予定をキャンセルして、昼食会のみ開催することになった。AFICS-J からは 8 名が出席した。昼食を取りながら、予定されていた議題の TICAD について、そのプロセス、過去、現在、将来について小松原氏から入念な説明があった。伊勢会長から、興味深かったのは、国連そして日本のアフリカ開発に対する考えと対応の変遷であり、1993 年に始まった日本、国連、Global Coalition for Africa による働きから始まる TICAD の発展と時代の変遷による変化と将来図は興味深いとのコメントがあった。

小松原氏から、NY 国連日本人職員会についての展望や現在行われている活動の報告をもらった。AFICS-J と海外の日本人職員会との繋がりについては、前回の執行委員会との会合でも触れてもらったが、小松原氏が

進めている世界規模での職員会の連携は大変貴重です。A-J は、今後も NY 国連日本人職員会とは密接に協力し、SGH への現職職員の参加と帰国の予定に関する情報などを知らせもらうようお願いした。
今回の会合から、今後は多くの A-J メンバーの方々に参加してもらい、一緒に考える機会を創る必要が重要であると感じたとの伊勢会長のコメントが寄せられた。（記録：宮地節子執行委員）

国連広報センター所長　根本かおる氏の講演会

「誰ひとり取り残さない！SDGs を『自分事』にして、世界を変革するアクターに」

AFICS-J のメンバーの皆様は依頼されて大学などに講演に行く機会も多いと思われる。また、最近ではスーパーグローバルハイスクール（SGH）などの取り組みにより、一般的に高校や中学のグローバル人材育成への関心は高まってきており、中学生や高校生に対してレクチャーを頼まれる機会もあるかと思われる。AFICS-J では SGH 支援プログラムのタスクフォースが立ち上げられ、特に SGH 校に対しての支援活動を開始し、資料づくりなども行なっている。大学生とは違い、中・高校生には内容の充実や正確性はもとより、どの様に伝えるかにも注意を払う必要があると思われる。こうした背景から、国連広報センター所長の根本かおる氏を迎え、国連が今若者に伝えたいことをテーマに講演会を 2018 年 11 月 2 日、国連大学 2 階ライブラリーで開催した。AFICS-J より 15 名が参加した。

根本氏はこの趣旨をよく理解されて、「誰ひとり取り残さない！　SDGs を『自分事』にして、世界を変革するアクターに」と題して、現在の国連の活動の中心となっている持続可能な開発目標（SDGs）に焦点を合わせ、写真をふんだんに取り入れたパワーポイントや、国連広報局およびその他からアクセス可能な動画なども使い、また、トピックごとに、そのトピックを話す理由や背景、中・高校生に話す時のアドバイスなどを交えてお話をして下さった。

まず冒頭で、AFICS-J が SGH を対象に活動していることを歓迎され、最近国連広報センターでも教育関係者からの問い合わせが多くなっていると指摘された。その背景には、小・中学校の学習指導要領の改訂で SDGs が入ってくることが近々予定されていることがある。また、全般的に SDGs への関心は高く、特に企業セクターでは

「SDGs に取り組まねば」という気運があるとされた。ただ、電通が行った意識調査によれば、認知度はそれ程高くないものの、理解した上での共感は高いという結果が出たという。根本氏は、SDGs はまだ「自分事」としてはとらえられていないとし、実感を持って国連を感じ、SDGs を理解してもらうには「敷居を思いっきり低くする必要がある」と述べられた。このことは、国連広報センターの大きな課題でもあるとされた。

SDGs は「続かない地球から、続く地球に変える」ものだという観点から、まず、地球の危機感を表した動画を使われた。また、統計をビジュアル化して分かりやすくした例として、最近、世界銀行の副総裁が講演した際に使用したスライドのコピーを配布して下さり、それを元に気候変動がサハラ以南のアフリカを直撃しており、また人口の推移から見て、アフリカ諸国のように非常に若い国が気候変動の直撃を受けかねない脆弱性を持っていることを説明された。さらに、ご自身が視察で実際に見た、小島嶼国であるモルディブでのゴミ処理能力の不備による環境破壊や気候変動の影響についても、写真を交えながら説明された。

気候変動が我々の対応以上の速さで進んでいると根本氏は指摘し、それによる資源の欠乏、紛争の増加や格差の増大などの様々な影響を説明し、「続かない地球から、続く地球に変える」ための対応策として出てきたとして、SDGs を紹介し、その成り立ち、また、MDGs から SDGs への変遷も説明された。そして、この実施には皆で関わっていかなくてはならないが、これを日本の企業に説明するときは、日本でよく使われる「三方よし」に「地球よし、将来よし」を加えて、「五方よし」と説明すると、分かりやすいようだと話された。また、一般の人を惹きつけるには「ワクワク感」を感じてもらうのが重要であるため、色を豊富に使ったアイコンは効果的であると説明された。

SDGs の大原則である「誰も置き去りにしない」に関して、最も置き去りにされがちなのは若者であるとし、若者の代表として、2015 年の SDG サミットの際に、2014 年ノーベル平和賞受賞者のマララ・ユスフザイ氏が行ったスピーチの動画を用いて、193 名の若者達が世界のリーダー達に目標実現に対する説明責任を求めたことを示された。そして、マララ・ユスフザイ氏は特別の家庭に育ったわけではなく、やりたいことを行動に移せたとの説明を加え、根本氏は「やりたい事を行動に移せて続けていけるのは一万人に一人だが、その一人になってみませんか？」と参加者に問うことにしていると述べられた。

また、全般的に日本は裕福であるが、子供達に話をする時には、世界の状況、例えば 10 億の人が無電化地域に住み、3 人に一人が清潔なトイレのアクセスがなく、9 億人が屋外排泄をしていること、そして子供の千人に一人が紛争地域に住んでいることなどを示し、同時に自分たちの足元にある課題にも目を向けてもらう様にしていると話された。

SDGs には変革（transformation）が必要だが、日本政府の対応はとてもシステマチックであったと説明した。SDGs 採択後の最初のサミットは日本の伊勢・志摩サミットであったが、その直前に SDGs 推進本部が設けられ、安倍首相が本部長となり、閣僚全員参加で臨んだ。その後、着々と政策を進め、先進的な取り組みをしている自治体、民間企業、市民団体などを表彰する「ジャパン SDGs アワード」を創設したが、根本氏はこの審査員の一人である。また、2018 年に自治体レベルまで浸透させるため、内閣府主導で 29 の SDGs 未来都市が選定され、その中の 10 都市が自治体 SDG モデル事業として、補助金を受けていると説明された。

SDGs 推進に関して大きな課題は資金で、世界的に見て年間 600～800 兆円、途上国だけでも年間 300 兆円が必要であるとし、公的資金だけでは間に合わないと指摘した。このため、ESG (Environment, Society and Governance) 投資の様に自ずと SDGs を裏打ちする様な投資が必要であると強調した。

日本政府の対応はシステマチックであるとしたものの、海外の研究所の報告書をみると、2017 年に 11 位であったものが、15 位に落ちており、17 のゴールのうち順調にいっていると評価されているのはゴール 4 の教育のみであると指摘された。また、特に、ゴール 13 の気候変動に関して厳しい目が向けられているとされた。その様な中で、2020 東京オリンピック・パラリンピック競技大会では、持続可能性を大会の重要なテーマとし、SDGs を推進すると明言しており、大会運営を SDGs と結び付けることで、世界的に発信する良い機会となると述べられた。

我々への課題としては、今のままのライフスタイルを続けると 2050 年には地球が 3 つ必要となり、ライフスタイルを変える必要があると強調された。特にプラスチックの問題を取り上げ、いろいろな写真や統計を使って、問題の深刻さを説明し、海鳥の例を取り上げた国連のドキュメンタリーも流した。日本の一人当たりのプラスチック消費量はアメリカに次いで世界第 2 位であるとして、自分でも、My Bottle を使う様にしているとされ、一人のできることには限りがあるが、「塵も積もれば」と説明していると述べられた。

SDGs は 17 の分野にまたがる幅広い取り組みのため、パートナーシップが頼りであるとして、様々なアクターとの連携を紹介された。中でもメディアの力は重要で、国連本部でもグローバル・コミュニケーション局（DGC）と事務総長室が SDG メディア・コンパクトを立ち上げ、日本からは、日本テレビ、朝日新聞と日刊工業新聞が創設メンバーとなっている。啓蒙活動の一環として、UNIC では上智大学と 2016 年より SDG 学生フォトコンテストを開催しているが、2018 年は「日本で見つけた SDGs」として、高校生も対象に加えたところ、応募者の６０％が高校生であったとされた。また、メディアの活動の一つとして、フジテレビが SDG をテーマに「Future Runner」という番組を制作していることを紹介し、一本を流した。それは「産後うつ」を克服し、それを話し合う場を提供する活動をしている女性の話だったが、その女性は SDGs 採択以前にその活動を始めていると指摘し、SDGs を彼女の活動の軸とすることで世界の同じ様な活動をしている人と事例を共有できたり、広がりができると説明された。SDGs を意識すれば、パワーアップした展開ができるとし、この様に価値観をライフスタイルのレベルに落とすためのメディアの力は重要であると強調された。また、サンリオのハロー・キティが YouTuber として SDGs を紹介する活動や吉本興業との笑いを通して敷居を低くして SDGs を伝えるという SDGs 啓発ビデオの活動などを紹介された。

最後に根本氏は「地球は子供達からの借り物」であるから、同じ状況、あるいはより良くして返さなくてはならないと述べ、将来の子供達が、SDGs は今の世代の現役たちが一生懸命取り組んだ人類のポジティブな遺産として習う様なものであってほしいとし、SDGs を共通の座標軸として、あらゆる人にアクションを取ってもらいたいと結ばれた。

その後の質疑応答でも、いろいろな例を挙げて、丁寧に対応してくださった。

伊勢会長は、「今日の講演を参考にして、『地球は借り物』ということを、どの様に伝えていくかを考えたいと思う。また、国連のことを話す時に、わかりやすい言葉で、日常生活と結びついた感覚で伝えていきたい」として、根本氏に感謝の辞を述べられた。（記録：高瀬千賀子執行委員）

第 47 回 FAFICS Council 年次総会報告

2018 年 7 月 20～25 日、第 47 回 FAFICS Council（元国際公務員協会連合会）年次総会及び２つの常設委員会 Standing Committee on Pension Issues と Standing Committee on After-Service Health Insurance (ASHI)がローマの FAO 会議室で開催された。委任状も含め世界中から FAFICS メンバーの 41 協会、63 名が出席した。佐藤純子執行委員は AFICS-Japan を代表して Council 及び常設委員会に、また FAFICS 副会長として役員会に出席した。

国連年金関連では、国連年金基金（UNJSPF）から Deputy CEO の Paul Dooley 氏と新任の国連年金投資担当の Sudhir Rajkumar 氏から、国連年金の運営に関して、以下のような報告が行われた。

- 国連年金基金は非常に健全な状態である。
- 年金データベース（IPAS）の安定化に伴い、年金処理機能が正常化し、新退職者の 80%の最初の年金支給が、必要書類が揃ってから１か月以内に行われている。
- IPAS と国連事務局のデータベース UMOJA との連携に関しては、改善されてはいるが、まだ今後の課題である。
- 国連年金基金の投資は非常に健全な状態である。長期的な利益を上げるために、手堅く適切な投資を行い、ステークホルターと積極的に関わっていく。
- 国連年金基金の ESG(環境、社会、ガバナンス)投資に関してはランキングが AA から AAA に格上げになった。

その他、定年後健康保険 （After-service Health Insurance (ASHI)）の受給資格に必要な勤続年数を現行の 10 年から 15 年に引き上げる案に FAFICS は反対することを Council は合意した。

新たに FAFICS の役員選挙が行われ、会長と財務は候補者数と定員数が一致したため無投票で選ばれたが、副会長７名と書記１名は選挙で選出された。副会長職については、９名の立候補者があり、投票の結果 AFICS-J からの推薦を受けた佐藤純子委員を含む７人が選ばれた。副会長職の定員数については、現在の７名から５名に減らすことを全員一致で合意され、来年の役員選挙から適用される。

（報告：佐藤純子執行委員）

AFICS-J ウェブサイトの更新について

AFICS-J のウェブサイトを会員にとり、より利便性が高く魅力的なものしていくため、AFICS-J のウェブ担当委員により、ウェブサイトのデザインと内容の改定作業を 10 月に行った。新しいウェブサイトのメニューバーの「資料室」には国連年金に関する有用な情報が掲載されているので、是非新しくなったウェブサイトを閲覧していただきたい。

http://www.afics-japan.org/j/

会員短信

新入会員：廣木謙三（UN-DESA ）さん１名が、新たに会員となりました。2019 年 1 月現在の会員数は 88 人です。

お知らせ

● **第8回年次総会のご案内：**

2019年3月25日（月）国際文化会館、午後５時半から開催予定。
総会17:30、講演「現場からの報告」 18:30
懇親会19:30 (会費８千円)
最寄駅「大江戸線麻布十番」7 番出口から５分
☆今から予定表に記入しておかれるようお願いいたします。

● **2018 年会費納入のお願い：**

2018 年会費（５千円）の納入をお願いします。
三菱 UFJ 銀行麹町支店 （店番 616） 普通預金
口座番号 ０１１８６４３
口座名義：アフィックス ジャパン ヤマモト カノウ
（AFICS-Japan 山本和）
☆前年度会費未納の方は、その分も合わせてお振込みください。
なお、年会費は年次総会受付でも納入できます。

● **会員からの投稿募集：**

AFICS-Jの中で共有したい情報（会員自身の著書出版やリタイア後のお話しなど）の投稿をお待ちしております。その他にもニュースレターで取り上げてほしいテーマやご意見がありましたら、AFICS-J事務局までご連絡ください。

発行：国連システム元国際公務員日本協会（AFICS-Japan)執行委員会
Email: afics.japan@gmail.com
Web: www.afics-japan.org

≪国連人≫

2000 年４月、砂漠研究者のグループとシリアのパルミラ遺跡を訪れた。ヨルダンから陸路シリアへの入国は、口蹄疫伝染防止のため乗用車のタイヤ消毒薬散布はあったものの、至極簡単だった。ダマスカスからパルミラへ４時間余り、砂漠の中に広がるギリシャ、ローマ時代の遺跡群は、その壮大さに圧倒されただけでなく、この地がかつてシルクロードの中継地として東西交易の重要な場所だったことを思わせる感慨深いものだった。その遺跡の大部分が 2015 年 ISIS により破壊されたというニュースを聞いた時、人々が大切に守ってきたものが狂暴な破壊者の手で一瞬にして消えてしまう恐ろしさと虚しさを覚えた。

人間に対する破壊という行為で、2018 年ノーベル平和賞受賞者のナディア・ムラドさんが公表した ISIS から受けた暴力と実態は 衝撃だった。ムラドさんの勇気を称えたい気持ちと同時にそれまで彼女が家族と共に穏やかに暮らしていたというイラク北部の故郷の風景を想像した。戦争のない国で暮らす者には想像を絶するほどの悲惨な出来事が起き続けていること、時には目をそむけたくなる事実に関心を持ち続けなければと思う。
（編集子）